

日本語の書き言葉をめぐるニューカマー のストラテジー

富 谷 玲 子

The aim of this paper is to analyze the Japanese proficiency and language use in daily life and “newcomers” to Japan. For the most part, newcomers do not attend or may not have access to classes for Japanese language learning, and therefore acquire oral communicative ability in Japanese through natural interaction. Some newcomers can speak Japanese fluently, but most lack Japanese literacy skills and can therefore neither read nor write Japanese. Consequently it is difficult for newcomers to use public transportation, and the range of occupations available is limited, and their lives are relatively constrained. However, most newcomers seem to lead stable lives and therefore lack motivation to learn written Japanese. In this study, newcomers were interviewed concerning their daily lives and attitudes toward written Japanese. Analysis revealed that newcomers navigate daily life without the use of written Japanese by acquiring information from friends and others through conversation. They employ an avoidance strategy when it comes to written Japanese. Through this strategy they are able to solve the problems presented by daily life. Unfortunately, the more they employ this strategy, the less likely it is that they will be able to acquire literacy skills in Japanese. As a result, it gradually becomes difficult for newcomers to live independently and to participate more widely in the Japanese community.

キーワード：ニューカマー 読み書き能力 ストラテジー
回避 社会参加 情報収集能力

1. 研究の目的

かつて日本国内に住む外国人は、いずれは帰国する「滞在者」であると考えられていた。しかし、ニューカマーの日本滞在期間は次第に長期化し、近年では「移民」とも呼べる状況になりつつある。ニューカマーにとってコミュニティ言語である日本語を習得するための教育を保障すべきだという認識も進みつつあるが、ニューカマーの子どもを対象とした日本語教育は学校教育への適応指導として提供されているものの、ニューカマーの成人を対象とした日本語教育を支える国の施策や制度は全くなく、市民活動や基礎自治体やその外郭団体の支援に任されたままである。こうした状況から、ニューカマーの学習機会は地域により大きく異なり、実際に日本語教育の機会が提供されているのは、ごく限られた地域に過ぎない。2009年のデータでは、日本国内の外国人登録者数は約219万人であるが、日本語学習者数は17万人に過ぎない。このことから、ニューカマーの学習機会が非常に乏しいことは明らかである。

ニューカマーを対象とした日本語教育の内容を見ると、サバイバルレベルの日常会話が優先され、学習に時間と根気を要する読み書き（ひらがな・カタカナ・漢字の読み書き）の学習は、後回しにされがちである。実際に、日本語の読み書き能力を持たないニューカマーは読み書き能力を持つ人よりもはるかに多いが、しかし、読み書き能力がなくとも「なんとか生活が成り立っている」ようにも見える。

本研究では、ニューカマーの読み書き能力のうち、主に日本語を読む能力（以下「読み能力」と記す）に焦点を当てて、ニューカマーが直面している事態を明らかにすることを目的とする。まず、ニューカマーの読み書き能力に関する先行研究を概観し、次に日本語読み能力と情報収集力の関係について整理する。さらに、ニューカマーの生活に関する志向とニューカマーの書き言葉をめぐるストラテジーについて、ケーススタディの検討に基づき考察を進め、今後日本語教育が取り組むべき課題を明らかにする。

2. 先行研究

ニューカマーを対象とした最近の研究では、日本語の読み書き能力がニューカマーの生活の質を大きく左右することが指摘されている。日本に5年～22年在住する結婚移住女性を対象とした調査では、日本語の読み書

き能力がない場合、公共の交通機関の利用にも困難をきたし、車での移動範囲も極端に狭くなる傾向にあること、それに伴い職業選択の幅も狭まり生活が極めて限定的な範囲で営まれる傾向があること、さらにそれに伴い、自己肯定感が低下する傾向にあることが報告されている（富谷・内海2008, 富谷2009, 富谷・内海・斉藤2009）。また、日常会話は教室での学習経験が全くなくても日本語との自然状況下での接触からある程度習得されるが、書き言葉は自然習得が不可能であることも指摘されている（富谷・内海・斉藤2009）。さらに、自然習得者の日常会話能力は日本滞在年数とは比例せず、大多数が初級に留まること（助川・吹原2008）、日本語読み書き能力も日本滞在年数とは全く関係なく、教室での教師監督下の文字学習の経験が読み書き能力獲得上の重要な要因であることも明らかにされている（富谷・山田2008）。

こうした状況を打開するためには来日初期の集中的日本語教育が有効であるとともに、読み書き能力のないニューカマーに対しては、ホスト社会側からの情報提供に関する工夫が必要であることも指摘されている（内海2009, 富谷・内海・斉藤2009, 富谷・山田2009）。

3. ニューカマー読み能力と情報収集力

3.1 ニューカマーの読み能力と利用可能な情報

長期間日本で暮らすニューカマーは、日本人と同様のライフステージを経験する。ライフステージの新たな局面（結婚・出産・就学・進学・病気など）に出会う度に、行政サービスや地域資源を利用しながら、それまでとは異なる新たな行動によって事態を解決していかざるを得ない。ライフステージの転換期に正確な情報を十分に収集し利用することができるかどうか、その後の生活の質を大きく変える。

日本では、重要な情報は文字媒体（書き言葉）で提供されている。ニューカマーにとって読み能力が問題となるのはこうした局面である。現在、ニューカマーに提供されている書き言葉による情報には、以下の三種がある。

- (1) 「日本語」の情報
- (2) 「やさしい日本語」による情報
- (3) 「多言語」による情報

(1)は日本人に提供される文書で、オーセンティックな情報である。この情報を利用するには、日本人の成人と同等の非常に高度な日本語の読み能力が必要である。

(2)は、外国人のために特別に平易な日本語に修正された書き言葉の情報で、漢字使用を制限するなどの配慮のほか、語彙や文型にも制限を加えた「やさしい日本語」である。ひらがなの読み能力と日常会話程度の語彙・文型の理解能力を前提とする。

(3)は、ニューカマーの母語あるいは理解可能な言語に翻訳された文書としての情報で、当該地域にすむ外国人の母語を勘案して作成されたものである。ニューカマーの中の多数派の母語（例えば中国語・朝鮮語・ポルトガル語・スペイン語）や世界共通語と認識されている英語への翻訳が多い。また、実際には翻訳者を確保しやすい言語に翻訳が集中する傾向があり、上記以外の言語（例えばタイ語・タガログ語・ベトナム語など）への翻訳は非常に少ない。翻訳には多大な時間と経費を要するため、常に最新の情報が翻訳整備されているとは限らず、どうしても情報が古くなりがちである。また、翻訳版を発行できる地域もごく限られている。

3.2 読み能力と情報収集力

ニューカマーが独力で、あるいは何らかの助けを借りて情報収集できるかどうかには、次の3要素が関与する。

- A 情報の形態 ：上記(1)~(3)
- B 情報アクセス力：メディアリテラシー（コンピュータ・携帯電話の所有などを含む）・居住地域の地理的条件など
- C 媒介者 ：ニューカマーと情報をつなぐ役割を担う人，家族（子ども）・隣人・支援者・コミュニティ通訳など

上記3要素に基づき、ニューカマーの読み能力と情報の利用可能性の関係をモデル化したのが、表1~3である。日本語の読み能力がある場合には、日本人が利用できる情報が利用可能である。情報アクセス能力がなく、なおかつ媒介者¹⁾もない場合には、まったく情報を利用することができない(表1)。

表1 日本語の読み能力があるケースにおける情報収集の可能性

独力で情報に アクセスできる	⇒	日本語の情報を利用できる やさしい日本語版を利用できる 多言語による情報を利用できる <u>多言語による情報を入手できない</u>	日本語の情報を利用できる やさしい日本語版を利用できる 多言語版による情報を利用できる <u>多言語による情報を入手できない</u> 情報利用不可能
独力で情報に アクセスできない	⇒	媒介者がいる ⇒ <u>媒介者がいない</u> ⇒	

表2 限定的読み能力（ひらがな）があるケースにおける情報収集の可能性

独力で情報に アクセスできる	⇒	<u>日本語情報を 利用できない</u> ⇒ <ul style="list-style-type: none"> やさしい日本語版を利用できる 多言語による情報を利用できる やさしい日本語版を利用できない ⇒ 媒介者がいる ⇒ 二次情報利用 <u>多言語版の情報を入手できない</u> ⇒ 媒介者がいない ⇒ 情報利用不可能
独力で情報に アクセスできない	⇒	<u>日本語情報を 利用できない</u> ⇒ <ul style="list-style-type: none"> 媒介者がいる ⇒ <ul style="list-style-type: none"> やさしい日本語版を利用できる 多言語による情報を利用できる <u>やさしい日本語版を利用できない</u> ⇒ 二次情報利用 <u>多言語による情報を利用できない</u> ⇒ 二次情報利用 <u>媒介者がいない</u> ⇒ 情報利用不可能

表3 日本語の読み能力がないケースにおける情報収集の可能性

独力で情報に アクセスできる	⇒	<u>日本語情報を 利用できない</u> ⇒ <ul style="list-style-type: none"> 多言語版による情報を利用できる <u>多言語版による情報を入手できない</u> ⇒ 媒介者がいる ⇒ 二次情報利用 <u>やさしい日本語版を利用できない</u> ⇒ 媒介者がいない ⇒ 情報利用不可能
独力で情報に アクセスできない	⇒	<u>日本語情報を 利用できない</u> ⇒ <ul style="list-style-type: none"> 媒介者がいる ⇒ 二次情報利用 <u>媒介者がいない</u> ⇒ 情報利用不可能

一方、たとえば「ひらがな」だけが読めるというような限定的な読み能力を持つケースでは、修正された情報（やさしい日本語版・多言語版）による情報収集を行うことが可能である。しかし、こうした情報が提供されていない地域では、媒介者を介した情報収集に頼らざるを得ず、得られる情報は媒介者の解釈を経た二次情報となる（表2）。さらに、日本語の読み能力がないケースでは、「多言語による情報」の利用を除くと、情報収

集はすべて媒介者に依存することとなり、媒介者が存在しない場合には情報にアクセスすること自体が実質上不可能になる（表3）。

このように、日本語の読み能力がない、あるいは限定的な読み能力しかない場合、ニューカマーは行政サービスなどの情報を入手することは極めて困難である。情報の多言語化・やさしい日本語版・コミュニティ通訳などによりニューカマーの情報収集を保障しているかのように考えられがちだが、実はそれは局地的保障にすぎない。

この現状を確認した上で、ニューカマーの書き言葉をめぐるストラテジーを検討したい。

4. ケーススタディ

4.1 プロフィール

フィリピン人女性MとNの2ケース²⁾について検討する。

Mは、調査時点で日本在住22年、14歳でタレントとして初来日し、その後母国と日本を行き来したのち、日本人の男性との間に子どもが2人生まれたが後に離婚して自立した。パート（工場労働）で生計を立てつつ首都圏の外国人支援が盛んな地域に小学生の次女と二人で暮らしていたが、調査時には再婚と出産を控え仕事を辞めていた。ローマ字を使って日本語で子どもの連絡帳等のやりとりをすることができ、婚約者とはひらがなでのメールのやり取りをしている。ひらがなを読むこととひらがなのメールを打つことはできるが、手書きすることはできない。漢字はほとんど読めない。学校教育はハイスクール（日本の中学校相当）までで、英語の会話と読み書きはできるが、会話は英語より日本語の方が得意だという。

Nは調査時点で日本在住15年、21歳でタレントとして初来日し、その後母国と日本を行き来したのち、外国籍の男性（母語と日本語のバイリンガル）と日本国内で結婚して子どもが2人生まれた。その後離婚し子どもを連れて約1年間フィリピンに帰国したが再来日した。調査時にはMと同じ地域で支援を受けつつ小学生の長男と幼稚園児の次男と3人で暮らしていた。学校教育は小学校までで、英語は会話も読み書きもほとんどできない。

MとNに、60分～90分の半構造化インタビューをそれぞれ2回行った。インタビューの内容は、①プロフィール、②生活行動圏、③ネットワーク、④日本語使用実態と⑤日本語習得過程である。

4.2 定住への志向

データ1・2から、M・Nともに日本定住志向が非常に強いことが分かる。

データ1：発話者 M・I (インタビューア³⁾)

「将来どこに住みたいか」という話題で

3143：I：あとね、聞いたかったのは、あの一、大きくなって、Aちゃん⁴⁾も大きくなって、あ、おなかの赤ちゃんも大きくなってから、も、ずーっと日本に住みたいと思う

3144：I：それとも

3145：M：そうねー、ほんとうはねー

3146：I：うん

3147：M：フィリピンにもう一人の子⁵⁾がいるなら、ずっと日本にいたい

3148：I：あ、そう

3149：M：うん

3150：M：だって、もう生活も何も、もう、こっちのほうが慣れちゃった、うーん

3151：I：長いもんねー

3152：M：うん

3153：M：あの一、なんだ、かんだ

3154：I：うん

3155：M：自分が、努力さえあれば

3156：I：うん

3157：M：なんでも仕事、手に入れるから

3158：I：まーね、できるわねー、今は

3159：M：そう、で、買い物も、生活も、やっぱ、日本に慣れちゃって

3160：I：うん

3161：M：向こう⁶⁾は、多分、一生懸命働いても、ここに、一か月分の給料手に入れられないな

データ2：発話者 N・I・T（フィリピン人通訳）

「将来どこに住みたいか」という話題で

- 2007：N：たぶん、うちの、自分の国に帰ったとしても、もう、駄目です
す
- 2008：I：あ、そう
- 2009：N：はい
- 2010：I：日本の生活のほうが
- 2011：N：もう逆に
- 2012：T：やりやすいね、フィリピンよりね
- 2013：I：どういう点が、フィリピンよりやりやすい
- 2014：N：フィリピンには、やっぱり長くあっちで住まなかったから、
なにも分からないんですよ
- 2015：N：なんか、日本に、初めて来たときの、感じです

4.3 書き言葉との接触

データ3～5から、MもNも、「やさしい日本語」や多言語による情報を得やすい環境で生活していながら、書き言葉の情報には積極的にアクセスしていないことがわかる。書き言葉を使わざるを得ない局面があると、媒介者（支援者のX・Rや区役所の職員）の助けを借りることにより対処している。Mは限定的な日本語の読み能力を持っているが、ごく一部のケース⁷⁾を除くと、多言語情報や「やさしい日本語版」による情報を得ることができていない。Nは日本語の読み能力がないことに加え英語の読み能力もないため、多言語情報からも「やさしい日本語版」からも情報を得ることができない。

このように独力で日本語の書き言葉情報に対処できないことに対し、MもNも不全感を抱いている。

データ3：発話者 N・I

「区役所などで手続きする時、どのようにしているか」という話題で

- 1724：N：あの一、今のマンションに入ってから、もう、ひとりで
- 1725：I：はい
- 1726：I：うーん

- 1727: I: その前は、だれかに助けてもらった
 1728: N: あの、Xさんに⁸⁾
 1729: I: うん
 1730: I: ここの
 1731: N: はい
 1732: I: あ、Xさんに、た、一緒に行ってもらって
 1733: N: はい
 1734: N: わたしのあの、あとに
 1735: I: はい
 1736: N: やっぱりまだ書類なんか、いろんなの、あの、あって
 1737: I: うん
 1738: N: それで、おねえさんに
 1739: I: うん、Rさん
 1740: N: はい

データ4: 発話者 N・I

「区役所などで手続きする時、どのようにしているか」という話題で（データ3に続く部分）

- 1774: I: じゃ、今は、役所なんかで書類を書くっていうときにも、自分で行って
 1775: N: はい
 1776: I: ちょっと、こ、わかんなかったら、聞いて
 1777: N: はい
 1778: I: 書いてもらったり
 1779: N: 教えてもらいながら
 1780: I: 教えてもらいながら書いてます
 1781: N: だから、それがすごい恥ずかしいんですよ
 1782: I: うーん
 1783: N: 自分で、あの、ひらがなでもいいから
 1784: I: 書きたい
 1785: N: どうやって、え、どうやって、書くんだけ、せ、急に、本番なっちゃうと、もうダメです
 1786: I: うーん、そうねー

1787 : N : もう、の、の、も、あのも、ぜーんぶ空っぽです

データ5 : 発話者 M・I

「区役所などで手続きする時、どのようにしているか」という話題で

2376 : M : もー、いや、ことばと、字を読めるのは、すごい大切だなぁ

2377 : I : ああー

2378 : M : とかすごい思って

2379 : I : それで、字、おぼ、覚えたいって

2380 : M : もう

2381 : I : 本当に思ってるんですね

2382 : M : もう、ダメですね、やっぱり、なにおきてるのか、もう、ほったらかしになって、こんど、だーんて、なんか英語で、なんか書かれ、そんで、急に、てか、なんか、ん、裁判まで、なに、なにー、これ、って思って、おどしみたいのが、払わなきゃなんないみたいのが

2383 : I : ああ、ああ、督促状ね

2384 : M : そうそうそう

2385 : M : 来るじゃないです

2386 : I : これは

2387 : M : 英語でさりげなく、どきっとする英語が、どういう風にかかれてるのか、なっているから、早くでなに、これ、さーっと、すぐに区役所行って

2388 : M : これ、わたし、人に借りたお金、覚えがないんだけど、これ、なんでしょう、お支払いですかみたいな

2389 : M : あー、これねー、ああだこうだで

2390 : M : なんですかー、わけわかんないで

2391 : I : うーん

2392 : M : 国民としての、ああだ、こうだ、こうだ、税金だ、ああだ、こうだ、こうだ

2393 : M : あーそうですか、じゃあ、払わなきゃ、こんな高いですかーみたいな

2394 : M : もう、びびる、びびる

5. 考察

Mの情報収集の可能性は3.2に示した【表2】に、Nは【表3】に相当する。しかし、MもNも書き言葉の情報へのアクセス志向は乏しく、積極的にアクセスを行ってはいない。MとNが入手可能な情報は、媒介者の解釈を経た話し言葉による二次情報であり、その正確さを検証するための一次情報を得る術はない。

直接書き言葉と接触せざるを得ない場合、日本人・同国人の支援者への相談や、情報の発信元（区役所など）に出向き状況に依存した会話に転換することで解決している。MとNは上記データのほかに「学校に行って直接先生に質問する」、「友だち（日本語ができる同国人）に聞く」、「みんなで（同国人と一緒に）行く」といったストラテジーを語っている。これらは、書き言葉を回避（avoidance）するストラテジーである。

書き言葉を回避し、話し言葉を用いて媒介者（Xさん、Rさん）の助けを得ることにより、確かにその場その場での個別の問題を解決することは可能である⁹⁾。しかし回避を繰り返すことは、書き言葉の学習への契機を逃し、書き言葉情報へのアクセス機会を逃すことを意味する。その結果、書き言葉が習得されることはなく、回避のストラテジーが繰り返し使用されるという循環を生む。こうした傾向は、MやNのような非漢字圏出身者に共通して見られる。

話し言葉のみを用いた生活は、状況に依存した範囲内での限定的な生活である可能性が高い。また、問題解決の方法も、媒介者に依存したものとなる。状況に依存しないジャンルの話題に対応できない可能性もある。また、たとえば社会の一員として知識を持つべき社会制度や規則を正確に理解する力や、自分自身の生活を向上させるために必要な会話能力が獲得されない可能性がある。日本語能力が限定的であると、接触も狭い範囲に留まり、ひいては、ニューカマー本人が暮らすコミュニティで自立した構成員として行動することを阻害する要因となりうる。

6. 今後の課題

ニューカマーを日本社会の構成員として認め、社会生活に必要な情報収集能力を保障する教育を提案することが喫緊の課題である。ニューカマーの読み書き能力と行動範囲の関係についてさらに調査を進めるとともに、読み書き能力と会話能力のジャンルの関係についても今後検討を進めた

い。現在のところ、まだ定住外国人の会話能力を容易かつ適切に測定する手法がない。その開発も必要である。これらを今後の課題とする。

注

- 1) 本稿では、ニューカマーが直面する問題を解決するために手助けを行う人を総称して「媒介者」と呼ぶ。支援者だけでなく、市役所の職員や学校の教諭のような一定役割を担ってニューカマーに接する人や、家族や親戚や子ども（未成年者を含む）など、血縁者や私的な繋がりのある人が媒介者となり、ニューカマーの生活を支えていることも多い。
- 2) 本稿では、平成19年度文化庁日本語教育研究委嘱「外国人に対する実践的な日本語教育の研究開発」の一環として行った聞き取り調査（2009年1月実施）のデータの中から、日本語での日常会話は可能だが、日本語学習経験がなく、日本語の読み書き能力が極めて限定的なフィリピン人女性2名のデータを取り上げ、分析を加えた。
- 3) インタビューは筆者が行った。(a) 発話交代、(b) 長いポーズに挟まれた部分を一発話と認定して文字化した。データ中の4桁の数字は発話番号である。短いポーズは「.」で、通常表記では表せない長音は「ー」で示した。
- 4) Mの次女。日本国籍を有している。
- 5) Mの長女。日本人男性との間に生まれた子だが、国籍はフィリピンで、フィリピンの祖母のもとで育てられている。Mは長女を日本に呼び寄せて一緒に暮らしたいというのを、このインタビューの中で語っている。
- 6) この前のNの話から判断すると、「むこう」はフィリピンを指す。
- 7) 例えばデータ5で語られている英語で書かれた督促状など。
- 8) 「Xさん」は、MとNが暮らす地域の多文化共生拠点の日本人スタッフである。データ3のNの発話にある「おねえさん」と「Rさん」は同一人物で、Xさんの勤務する多文化共生拠点のフィリピン人スタッフである。
- 9) こうした傾向は、在日インドネシア人労働者の調査でも報告されている（助川・吹原2008）。今後の調査が必要ではあるが、非漢字圏出身のニューカマーに共通する一般的傾向と考えることができそうである。

参考文献

- 内海由美子（2009）「初期日本語教育の重要性和社会参加—外国人散在地域に居住する外国人女性に対する聞き取り調査から—」（日本語教育学会2009年度秋季大会パネルセッション「日本人と結婚した外国人女性の社会参加と初期日本語教育—日本語教育を受ける機会のなかったケースの分析から—」パネル1）『2009年度日本語教育学会秋季大会予稿集』, 69-71. 日本語教育学会
- 助川康彦・吹原豊（2008）「在日インドネシア人労働者の日本語習得を阻害する要因に

- 関する考察』『2008年度日本語教育学会秋季大会予稿集』, 166-171. 日本語教育学会
- 富谷玲子 (2008) 「ニューカマーのことばと暮らし—横浜における市民と行政の取り組み—」神奈川大学人文学研究所編『神奈川大学人文学研究叢書24 在日外国人と日本社会のグローバル化—神奈川県横浜市を中心に—』, 213-244. 御茶ノ水書房
- 富谷玲子 (2009) 「第3章 カリキュラム開発プロジェクト第4節 教育機関調査」『平成20年度文化庁日本語教育研究委嘱「外国人に対する実践的な日本語教育の研究開発（「生活者としての外国人」に対する日本語教育事業）—報告書—』, 140-154. 日本語教育学会
- 富谷玲子 (2009) 「日本人と結婚した外国人女性の学習機会と社会参加—読み書きできずに暮らすということ—」（日本語教育学会2009年度秋季大会パネルセッション「日本人と結婚した外国人女性の社会参加と初期日本語教育—日本語教育を受ける機会のなかったケースの分析から—」パネル2）『2009年度日本語教育学会秋季大会予稿集』, 72-73. 日本語教育学会
- 富谷玲子・内海由美子 (2008) 「生活実態調査プロジェクト：外国人配偶者（女性）調査」『平成19年度文化庁日本語教育研究委嘱「外国人に対する実践的な日本語教育の研究開発」（「生活者としての外国人」に対する日本語教育事業）—報告書—』, 60-78. 日本語教育学会
- 富谷玲子・内海由美子・斉藤祐美 (2009) 「結婚移住女性の言語生活—自然習得による日本語能力の実態分析—」『多言語多文化—実践と研究』第2号, 116-137. 東京外国語大学多言語・多文化教育研究センター
- 富谷玲子・山田泉 (2009) 「第3章 カリキュラム開発プロジェクト 第3節 文字教育」『平成20年度文化庁日本語教育研究委嘱「外国人に対する実践的な日本語教育の研究開発（「生活者としての外国人」に対する日本語教育事業）—報告書—』, 119-139. 日本語教育学会
- Tarone, E. 1983. "Some thought on the notion of communicative strategy." In Faerch and Kasper. *Strategies in Interlanguage Communication*. Longman. pp61-74

* 本稿は、「日本語プロフィシエンシー研究会国際シンポジウム『生活日本語とプロフィシエンシー』プロフィシエンシーの原点である現実生活における日本語能力の探究」における口頭発表（2010年7月18日）に基づき、加筆したものである。